

東北福祉大学 通信教育部 福祉心理学科 学びの振り返りアンケート結果

- ・2018年3月通信教育部 福祉心理学科卒業生 43名中 25名回答（回収率 58.1%）。
- ・多くの項目で 80%以上の方が、当初の想定で概ね理解していると判断される「4」「3」「a1」の回答であり、基礎的な考え方は概ね理解していただいていると考えられる結果となりました。
- ・質問項目と回答結果は下記のとおりです。

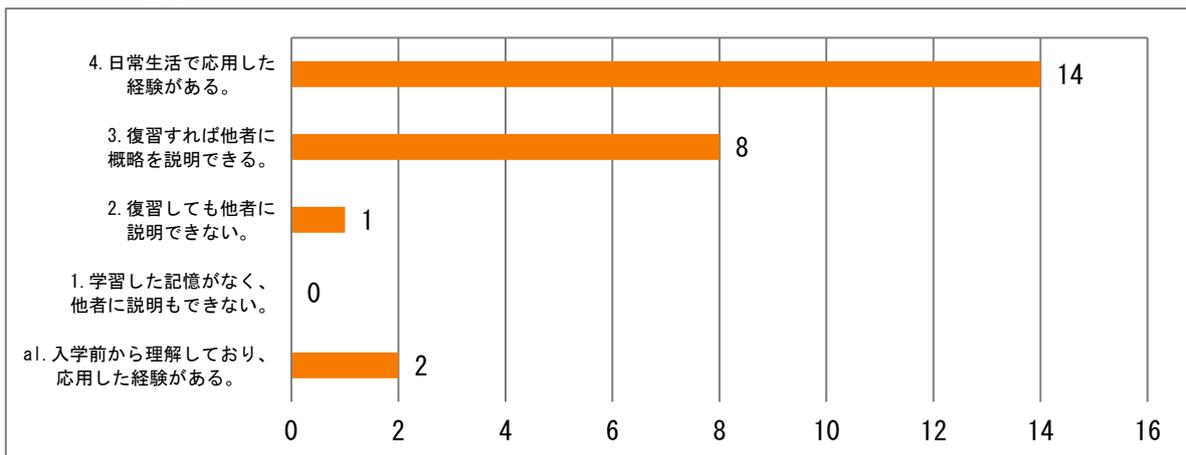
【質問】福祉心理学科で学んだ内容の一部について、振り返りをしながら、現在のあなたがその知識をどれくらい身に付けているかを教えてください（主観的な判断で結構です）。
一番あてはまると思う番号を1つ選び○を付けてください。

4	3	2	1	a1
在学中に学習し、日常生活で自身や他人の行動や心の動きを把握する際にあてはめて考えたり、応用したりした経験がある。	在学中に学習し、復習（*）すれば他者に概略を説明できる。	在学中に学習したが、復習（*）しても他者に説明できない。	在学中に学習した記憶がなく、他者に説明もできない。	通信教育部入学前から理解しており、日常生活で自身や他人の行動や心の動きを把握する際にあてはめて考えたり、応用したりした経験がある。

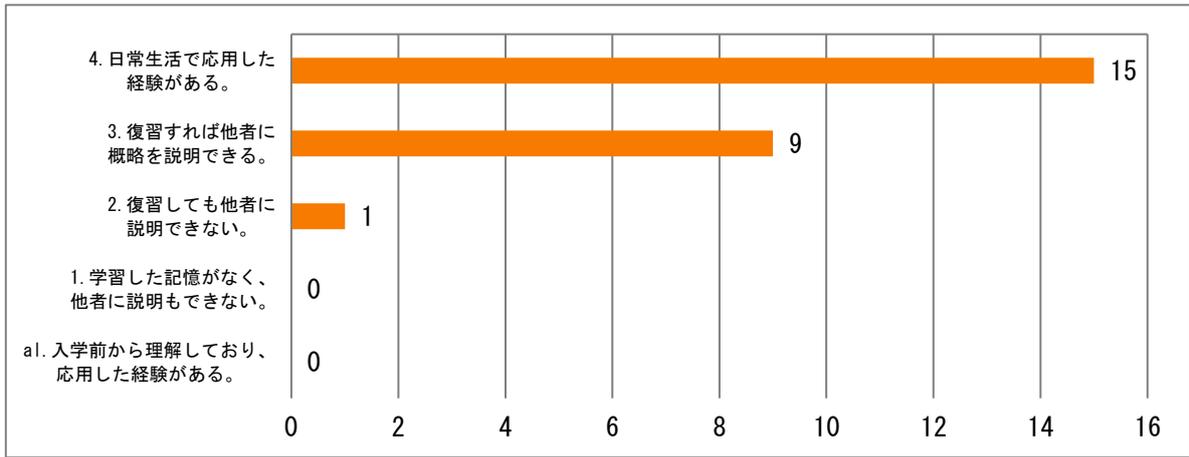
- ここでいう「在学中の学習」とは、通信教育部のスクーリングや教科書、レポート学習、その過程で自身で調べたりした学習などを含めていただいております。
- ここでいう「復習」とは、教科書や関連するホームページを読み返したりすることなどを指すことにします。復習により、または復習しなくても、内容を思い出し他者に説明できると感じられる状態、ならば「3」に、内容を何となくは思い出す、自身でわかっていないとか、他者に説明できないと感じられる状態ならば「2」に○をしてください。
- 「4」と「3」の両方に当てはまる場合は、実際に知識を活用したことがあるレベルの「4」に○をしてください。

1) 人間の能力の不完全性・限界などについて

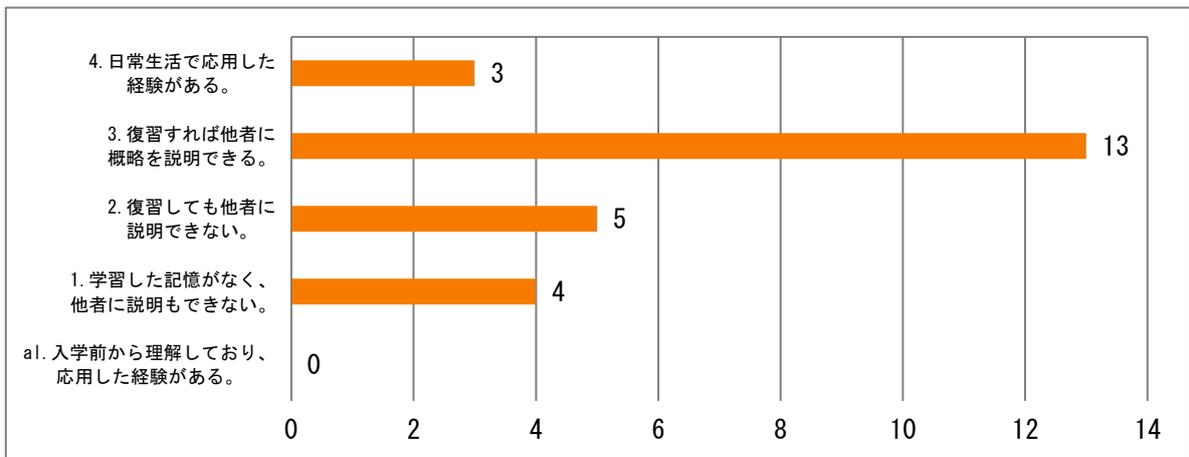
- ① 「無意識」の存在から、「自分の意思で行っていると思っている行動や思考が、無意識から影響を受けている可能性がある」こと



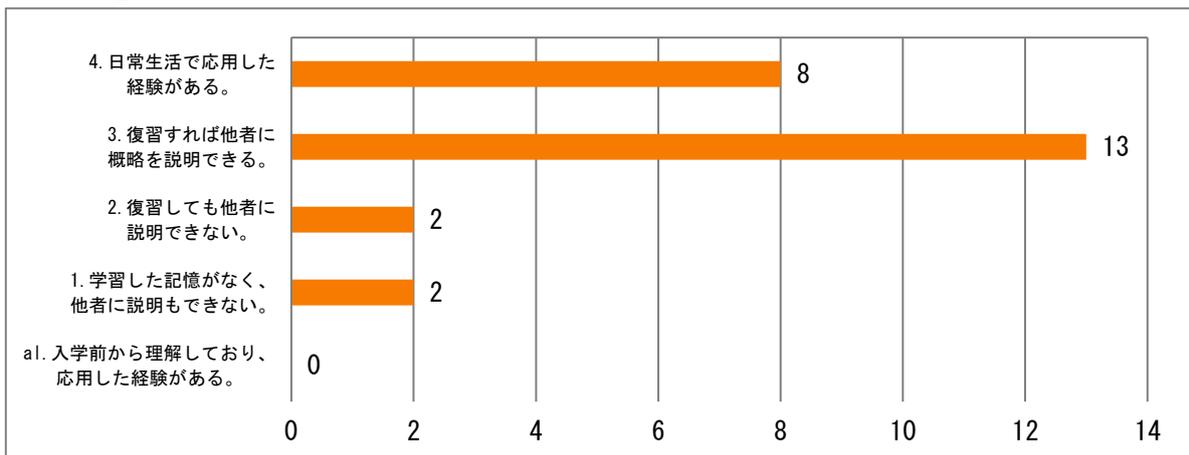
② 「錯視」現象、「スキーマ」「バイアス」の存在から、「人間は外の世界を正確に認知しているわけではない」「色眼鏡で見ている可能性がある」こと



③ 雪原の薄氷の上を渡る旅人の例など、人間は現実ではなく主観的に認知した環境に基づいて判断・行動し、それが合理的判断・行動でないこともあること

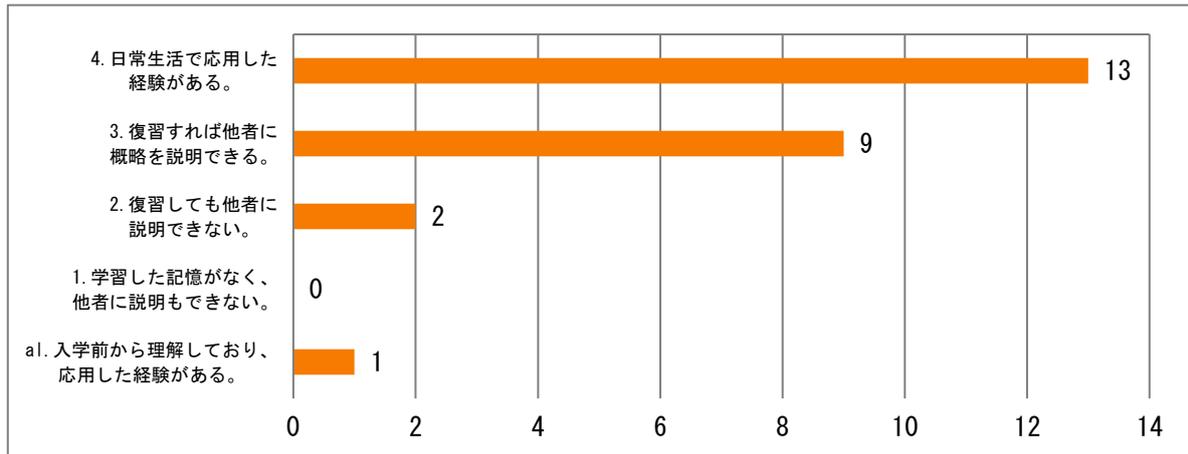


④ 「ミルグラムの実験」から、「権威者の指示があれば常識人が理解しがたい残虐なことをする可能性がある」こと

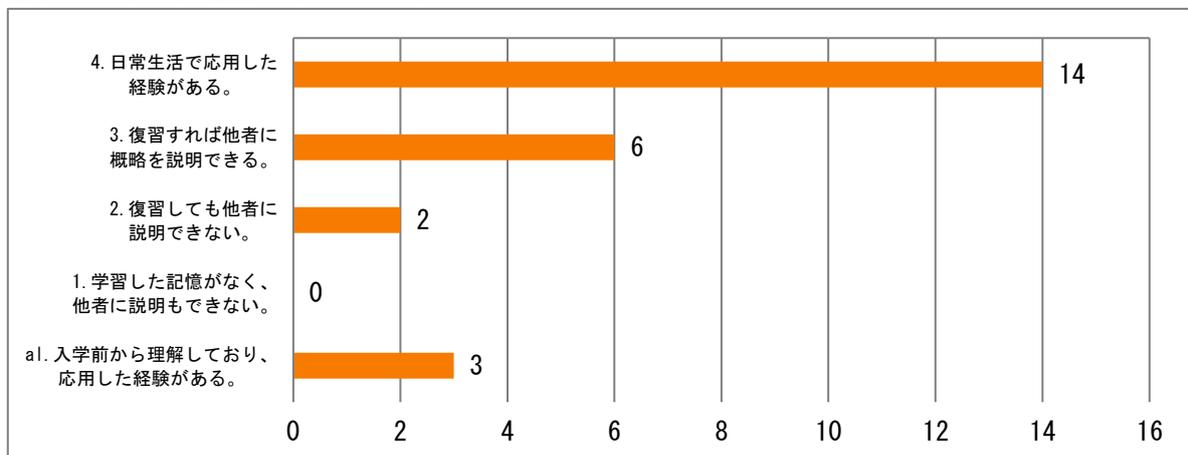


2) 自己理解・他者理解を行う際の視点について

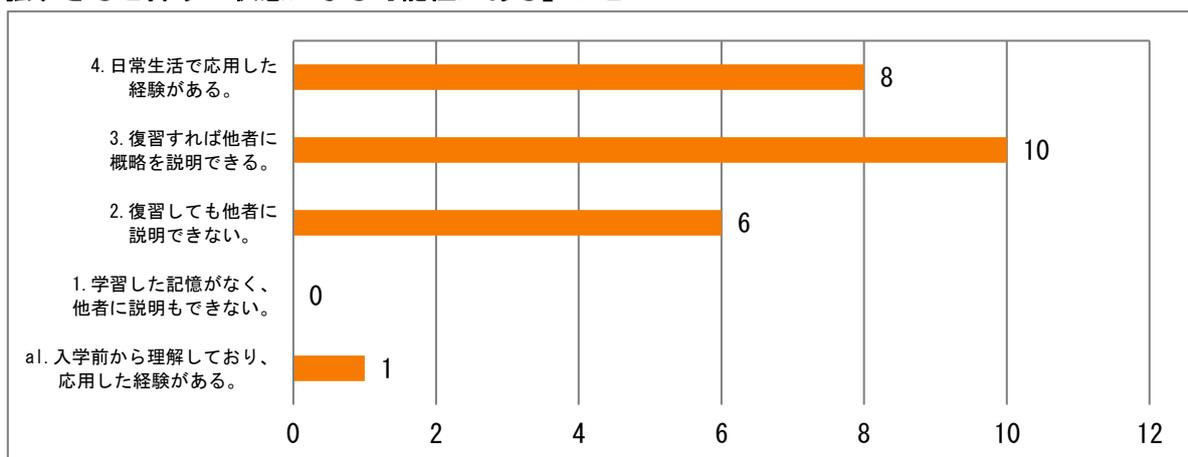
- ① 「防衛機制」(抑圧、反動形成、投射など)により私たちは不安や緊張を解消し現実に適応するが、防衛機制の働きで適応上の問題が起きる場合もあること



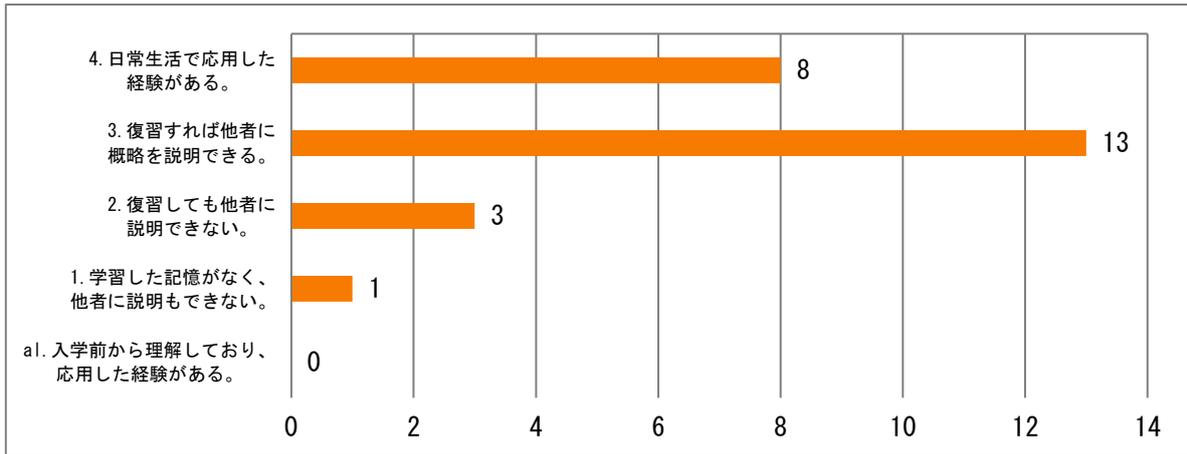
- ② 人間の行動の原因の1つは、さまざまな欲求(食欲・睡眠欲、安全や人間関係を求める、評価と承認をを求めるなど)を満たすためであること



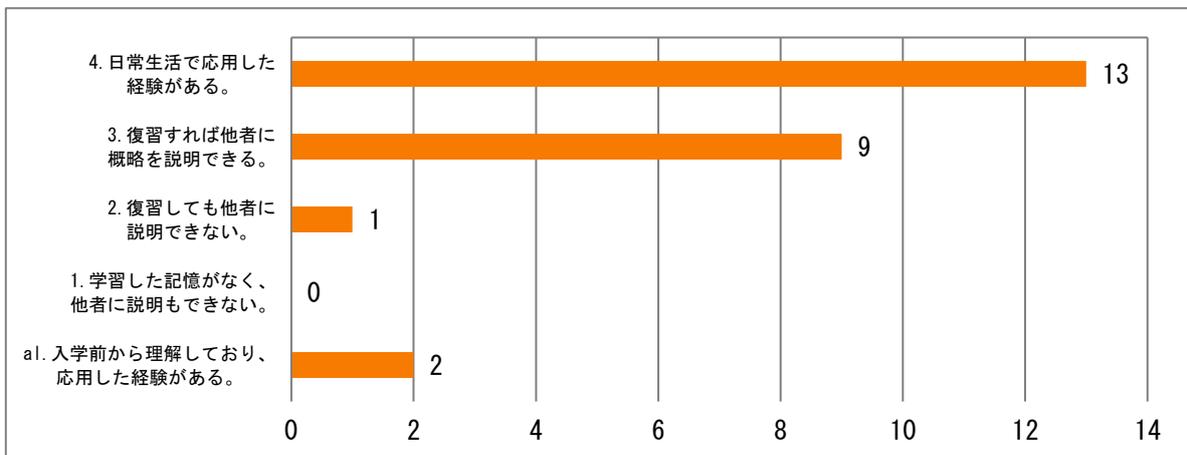
- ③ 「原因帰属の理論」から、「原因をどこに求めやすいかの自身の傾向の把握は役立つ」「自責の念が強すぎると抑うつ状態になる可能性がある」こと



- ④ 「社会的促進・手抜き」「アッシュの同調実験」など社会心理学の様々な知見から、私たちの認知や行動は、他者の存在や周囲の環境から大きな影響を受けており、その影響を私たちが必ずしも意識しているわけではないこと

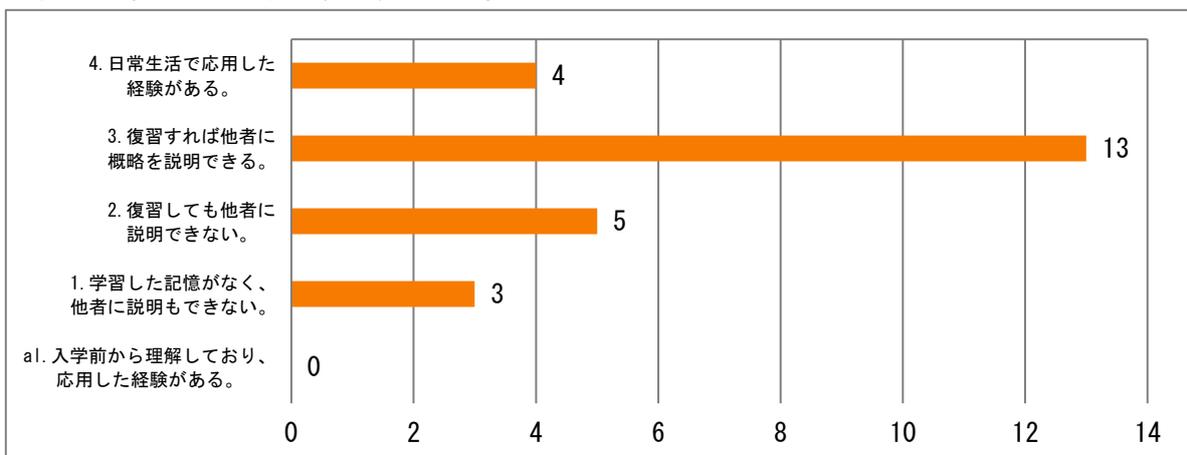


- ⑤ 自分の力ではどうしようもない失敗経験が続くことで、「学習性無力感」に陥り、やる気を失ったり、自暴自棄になっている人がいること

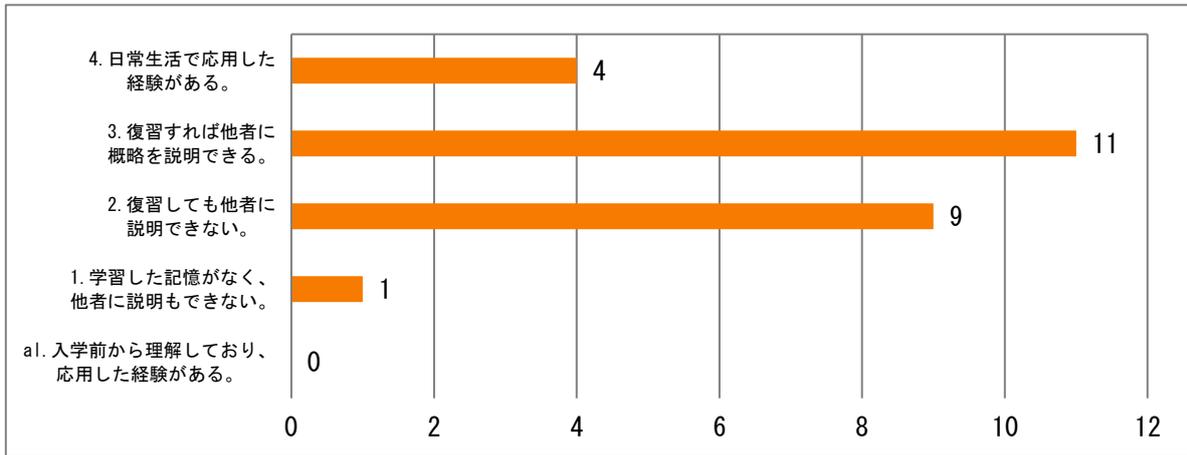


3) 集団理解・社会理解を行う際の視点について

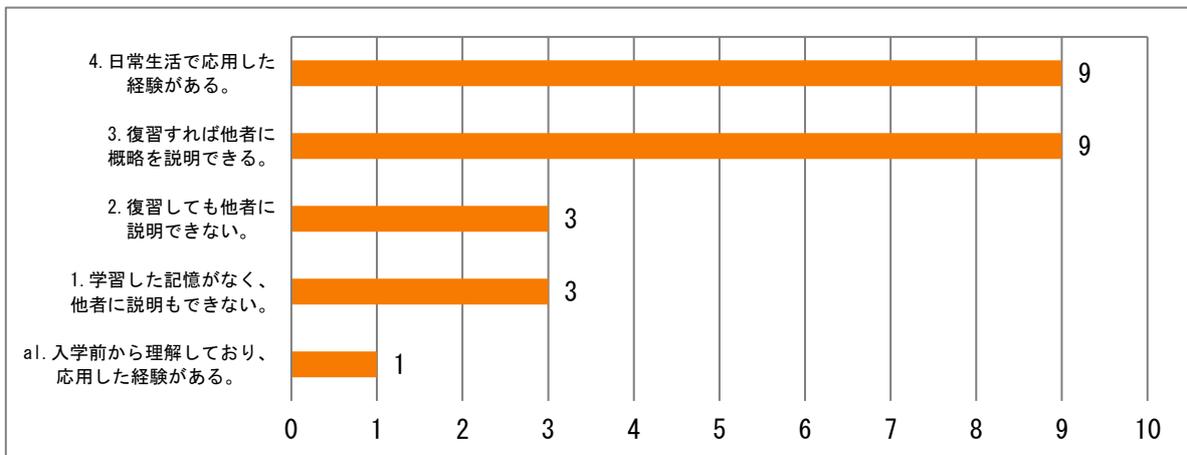
- ① 「P-O-Xのバランス理論」「認知的不協和の理論」から、バランスがとれていない関係・認知がバランスあるものになろうとする力が働くこと



② 「レヴィンの法則」から、「個人要因と環境要因で決まる」「何かが起きた時に個人のみの要因にしてしまいがちな思考は誤りの可能性がある」こと

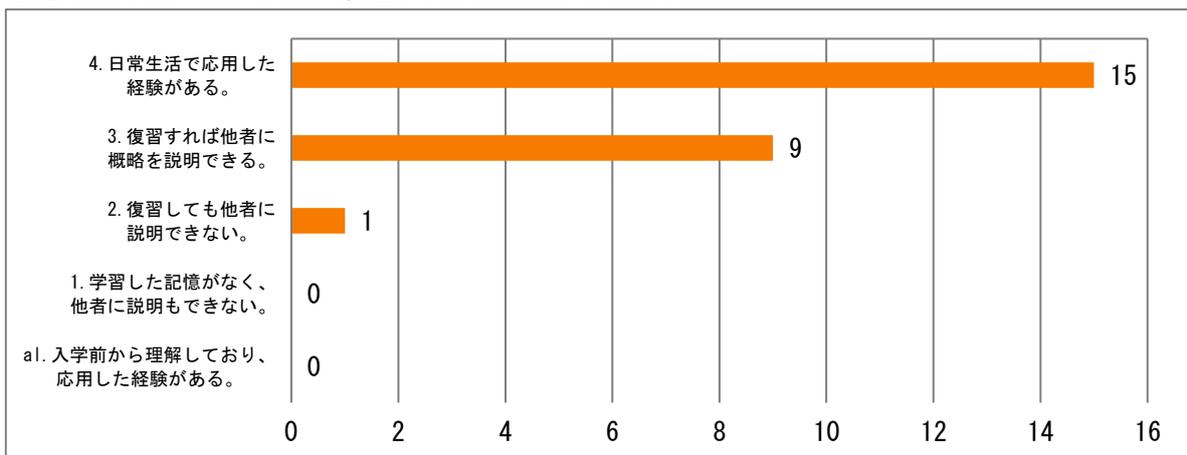


③ グループによる問題解決・意思決定は、たとえば集団凝集性が強いと結束を優先して反対を唱えにくくなるなど最適な結論が出ないことがあること

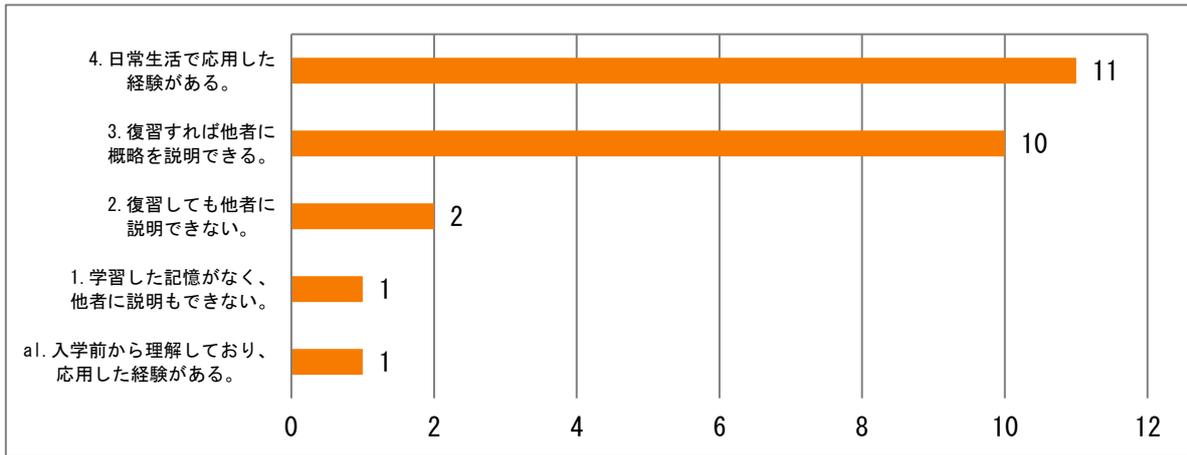


4) 発達と教育に関する知識・視点について

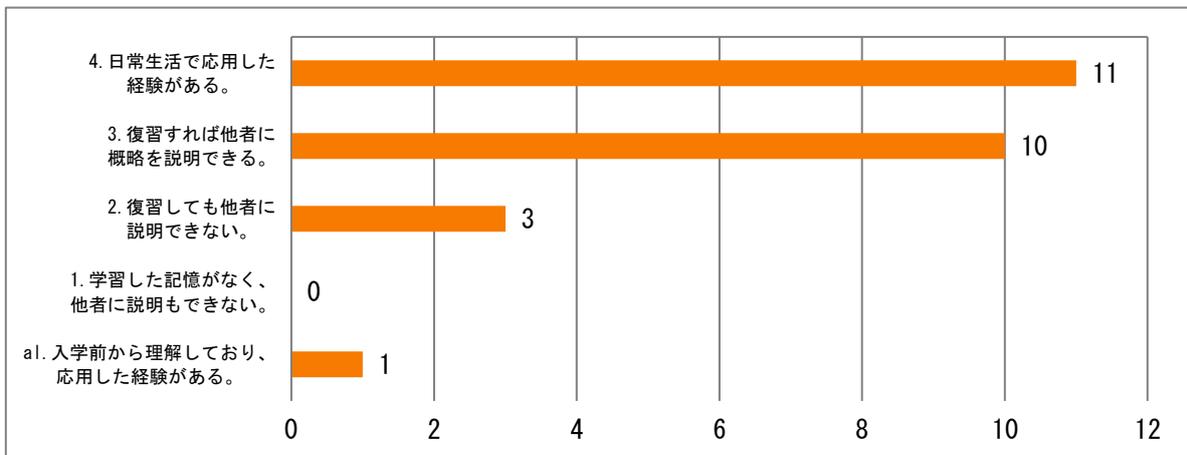
① エリクソンの考えでは、各発達段階には克服すべき危機、達成すべき発達課題があり、それを乗り越えないと以降の発達に影響を及ぼすことがあること



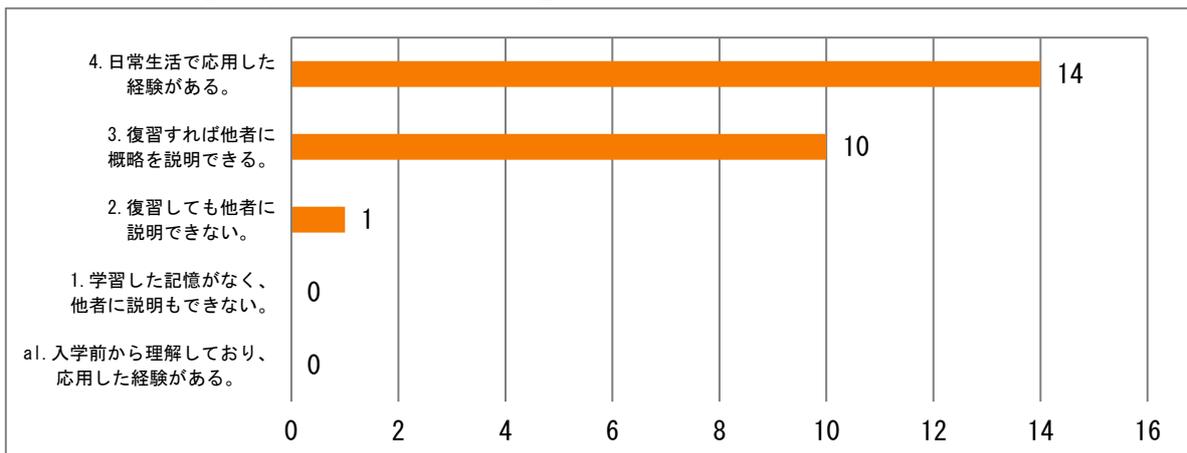
② 「ハーロウのサル」の針金・布製母親の実験から、安全基地の役割を果たす発達初期の養育者との関係・愛着形成は将来の発達に重要な役割があること



③ 「発達の最近接領域論」では、子どもが独力で解決できるレベルより少しだけ難しいことを大人と共同作業することでできることを広げていくこと

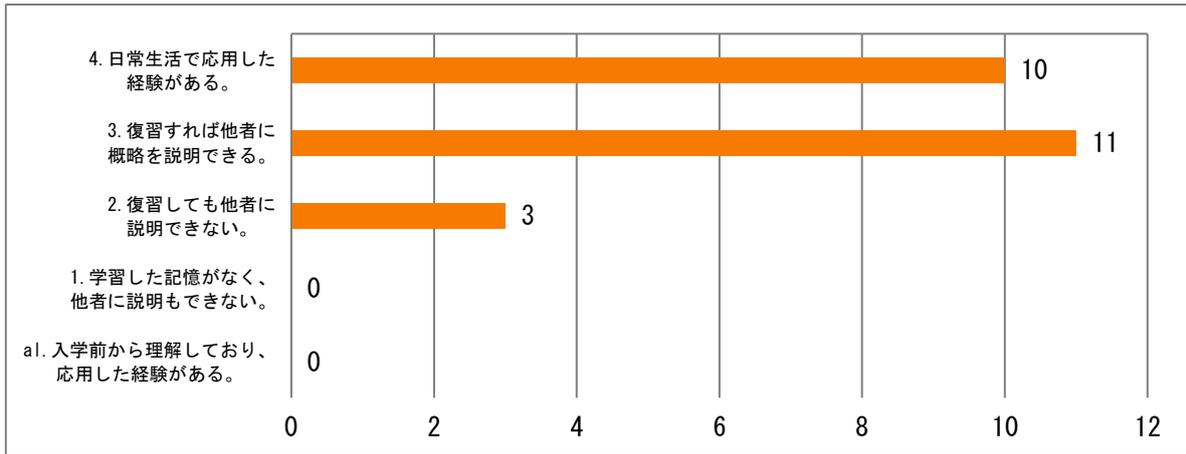


④ 生涯発達心理学の知見から、「人は一生涯発達し、結晶性知能など高齢期に伸びる力がある」「新生児も人の顔や表情がわかるなど有能である」こと

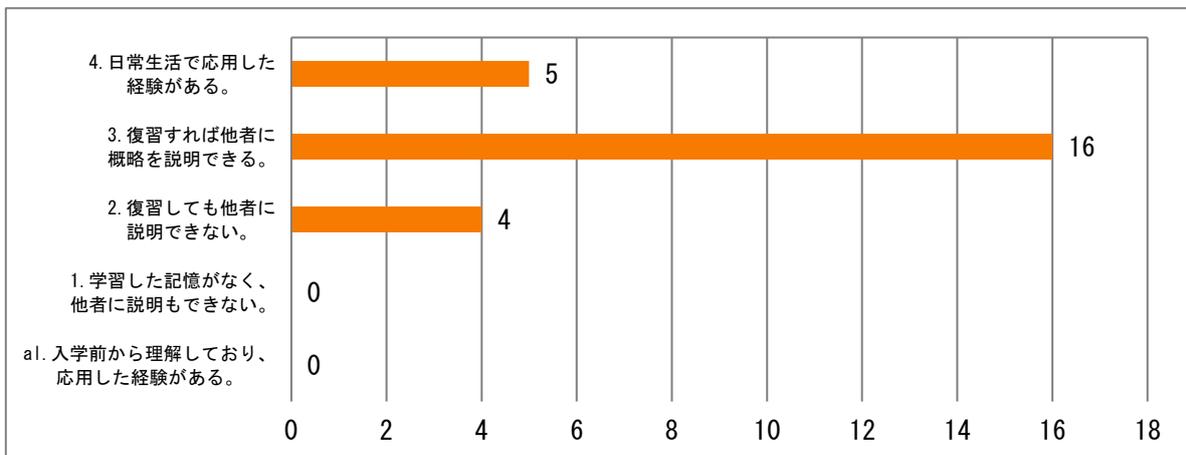


5) 学習に関する知識・視点について

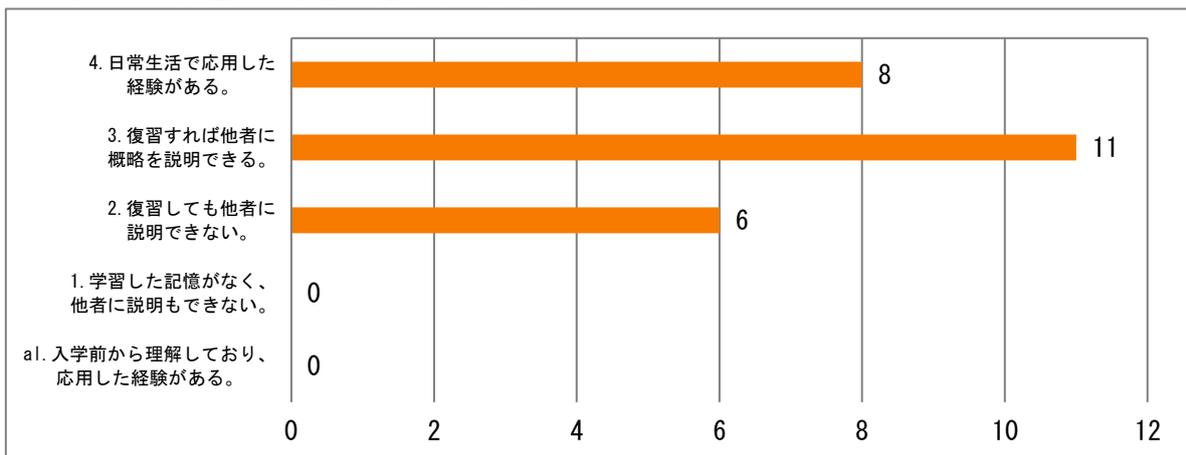
① 心理学では、ある行動や習慣の形成を「学習」の結果としてとらえること



② 「行動主義」「S-R 理論」から、ある行動が起きた時に賞罰を刺激として与えることで、よい行動も悪い行動も条件づけによる学習で形成できること

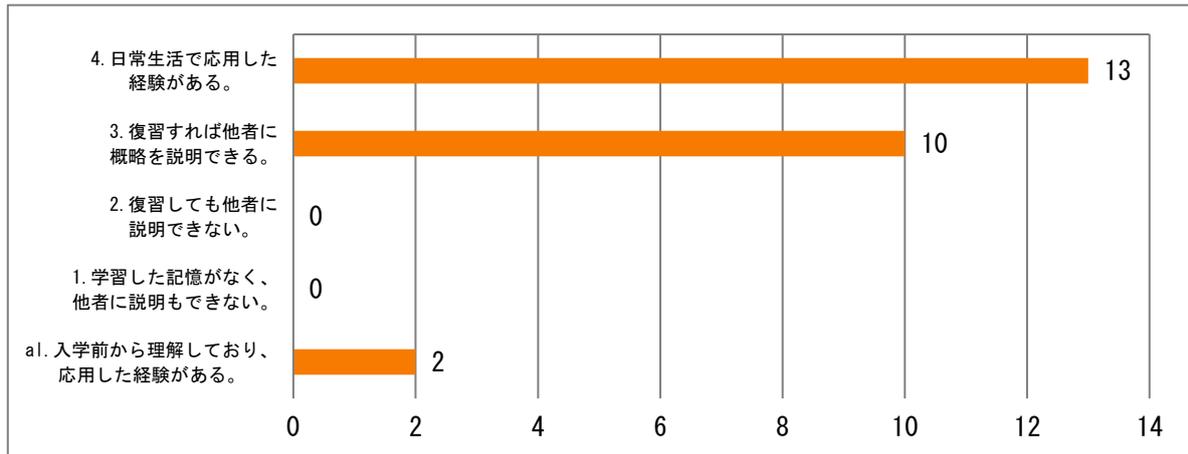


③ 「認知主義」の学習観では、賞罰や繰り返しよりも、有意義な学習、相互に関連づいた知識や学習者のスキーマと関連した学習が効果的であること

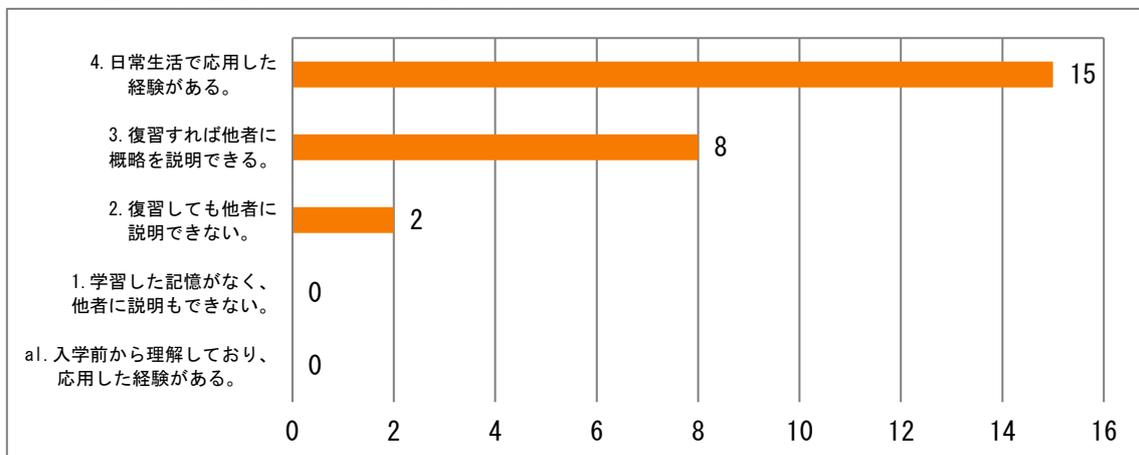


6) 心理学的な支援・健康に関する知識・視点について

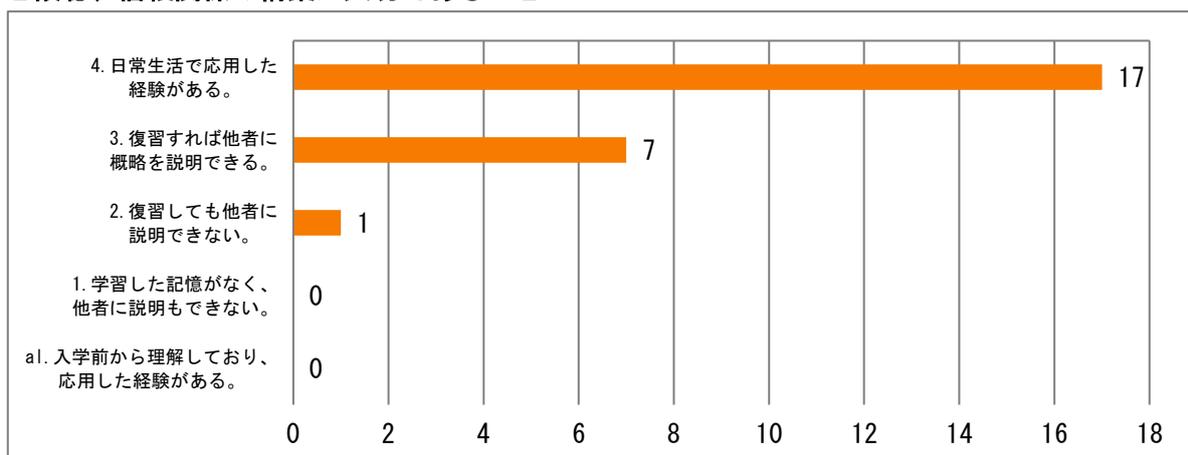
- ① 人を支援する際に、その人や周囲の状態を知る「アセスメント」が大切で、心理検査だけではなく面接・観察など多側面からの理解が必要なこと



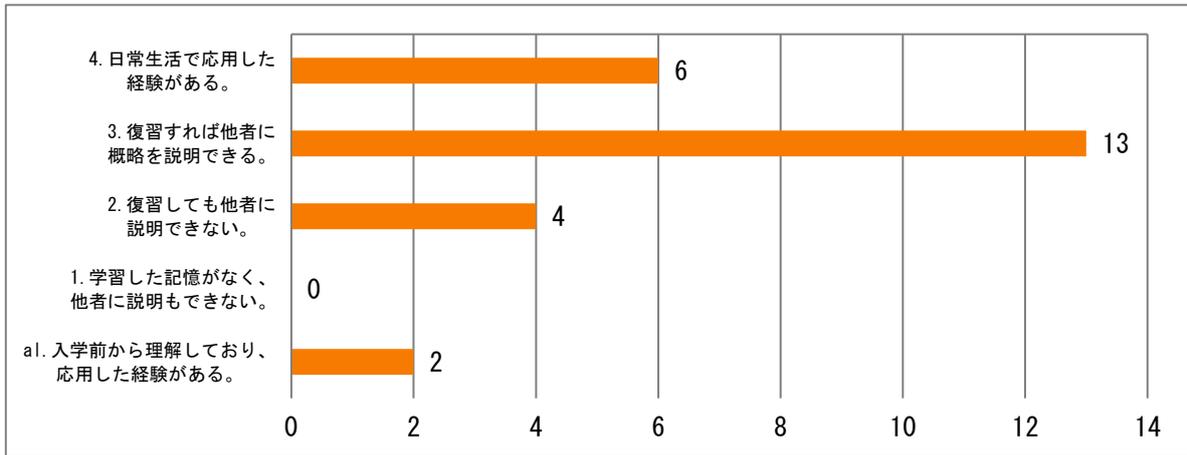
- ② ロジャースの「共感的理解」「無条件肯定的配慮」「治療者自身の自己一致」がクライアント自身の成長に力をおく支援者がとるべき態度であること



- ③ カウンセリング場面では、クライアントの不安や抵抗、転移や逆転移などの気持ちを理解し、受容と傾聴、信頼関係の構築が大切であること

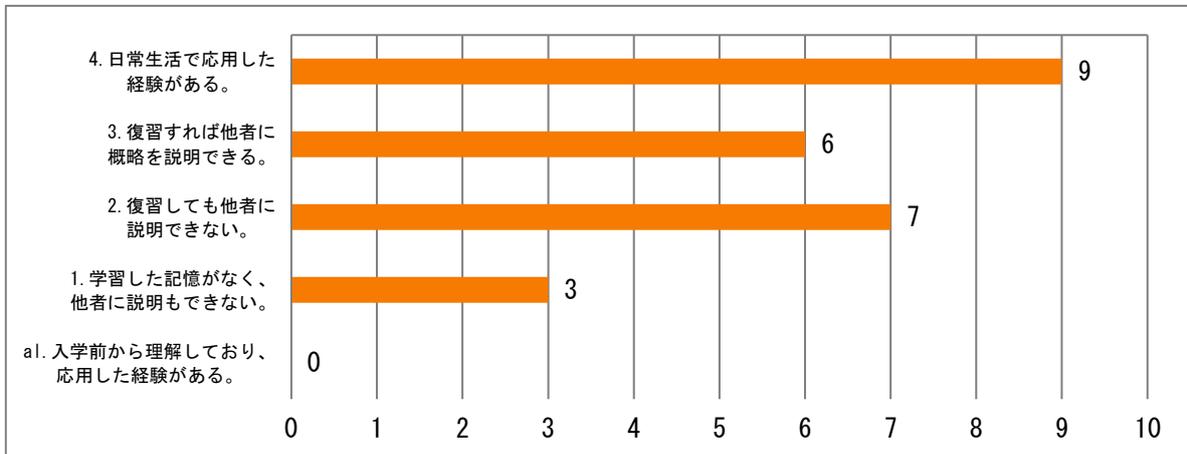


④ 障害と健常、異常と正常の境界ははっきり分けられるものではなく、連続しており、所属集団や社会の影響を受けて変わりうるものであること

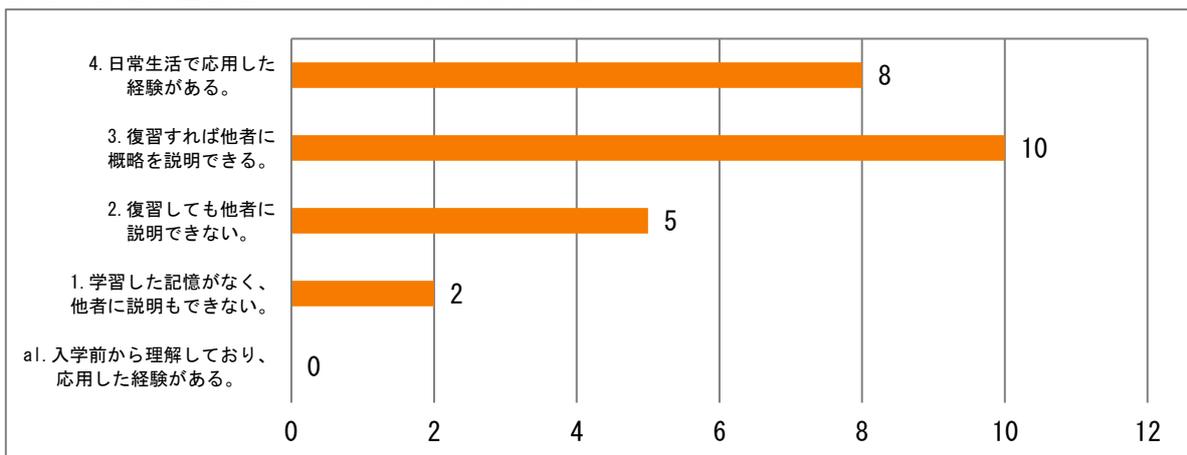


7) その他

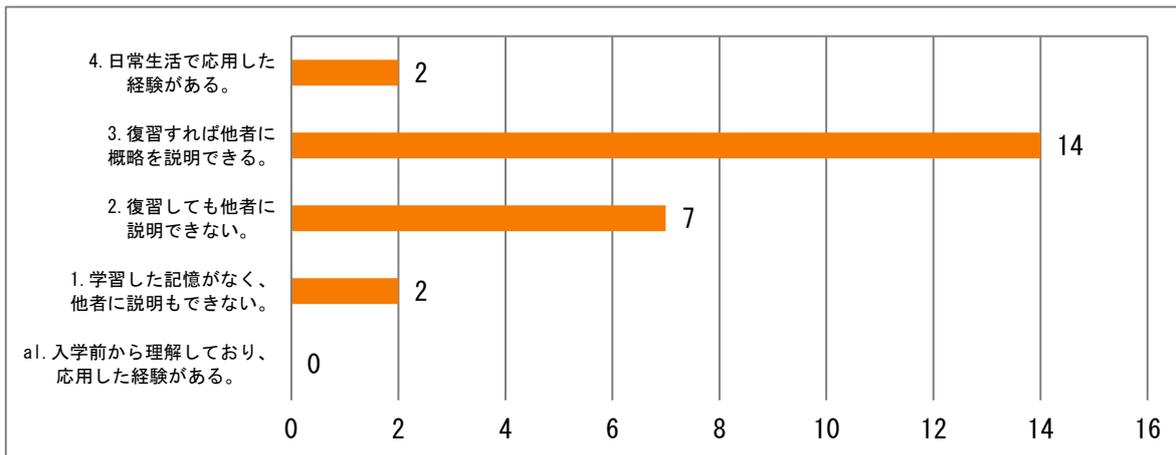
① 「予言の自己成就」「ピグマリオン効果」から、「人が予言や期待にそった行動をとるため、予言・期待どおりの事実が起きることがある」こと



② 常識では「悲しいから泣く」「性格→行動」だが、「泣くから悲しい」「行動→性格」など、私たちの行動が感情や性格をつくっていく面もあること

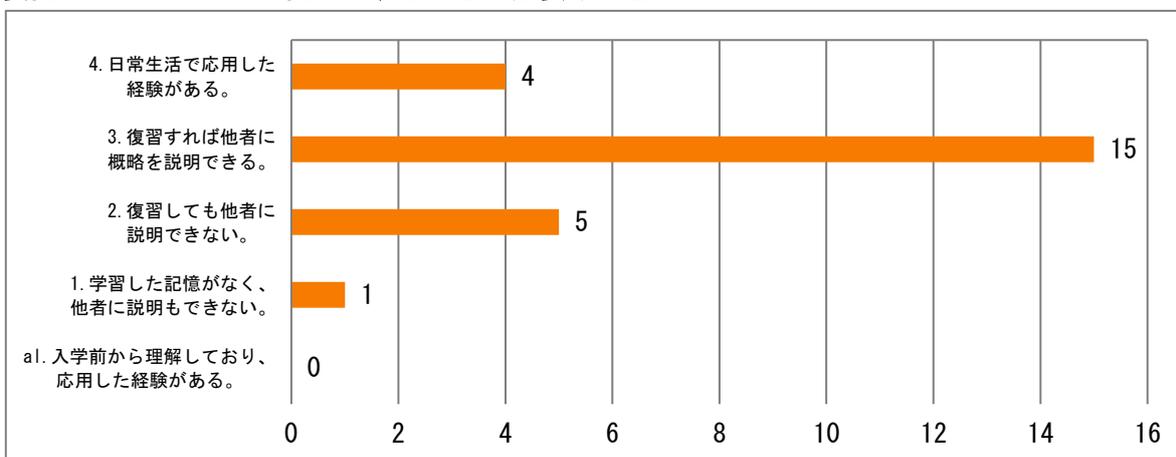


③ 「ゲシュタルト心理学」の考え方（まとまりの知覚・仮現運動）から、「全体は部分の寄せ集めではない」こと

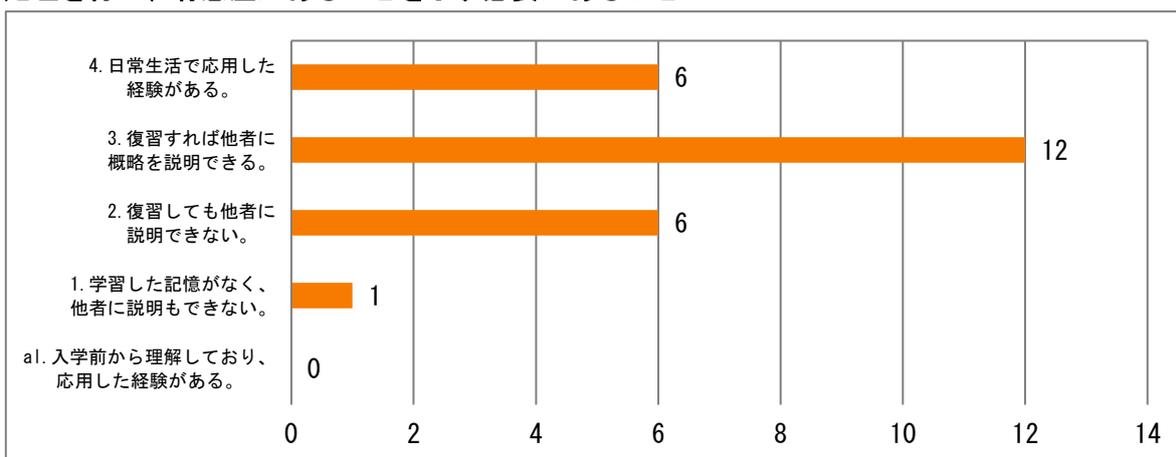


8) 科学的な思考法について

① 「仮説検証型」の「心理学実験」で、仮説が成り立つかの正確な結論を出すには、比べる条件以外の要因はコントロール=同じにすることが必要なこと



② 「グループ間に差がある」などの仮説が言えるためには、結果の単純比較ではなく、統計的な検定処理を行い、有意差があることを示す必要があること



③ 人間や社会に関する心理学的な説明は、個人差や状況の影響を受けるため、どのような場合でも常に100%当てはまる可能性はほとんどないこと

